

筋ジストロフィー病棟入院患者の重症度・看護必要度の検討

三上順子 樋口浩司 中井健一 新堀悦也 三原康弘 藤本麻由 多田羅勝義*

IRYO Vol. 64 No. 5 (322-327) 2010

要旨 筋ジストロフィー病棟の入院患者の重症度・看護必要度を検討した。われわれは、客観的に重症度・看護必要度を評価できる指標として、ハイケアユニット入院医療管理料算定の基準を用いた。対象とした40例のうち人工呼吸実施者は28例であり、入院患者の70%に達していた。疾患はデュシェンヌ型筋ジストロフィーが31例、その他の筋ジストロフィーが3例、その他6例であった。評価基準にあてはまる例は39例であった。筋ジストロフィーという疾患の特性により看護必要度も非常に高いこと、またこれらの介助が多くの場合人工呼吸下で行われなければならないことが証明された。このような、多数の人工呼吸患者を同時に看ることを余儀なくされる現在の筋ジストロフィー病棟には、安全管理面で大きな問題があると思われた。

キーワード 筋ジストロフィー, 重症度, 看護必要度, 人工呼吸

はじめに

過去、筋ジストロフィー病棟は大多数が小児のデュシェンヌ型長期入院患者で占められていた。現在、徳島病院ジストロフィー病棟では相変わらずデュシェンヌ型患者が多いが、その約70%が20歳以上で、それにともない病態はより重症化している。病態の重症化としては、自力歩行可能な患者がまったくいなくなったこと、また人工呼吸患者が増加したことなどを挙げるができる。なかでも人工呼吸患者の増加は安全管理上からも大きな問題となっている。

一方、かつて筋ジストロフィー病棟（筋萎縮症病棟）には措置による長期入院患者しか受け入れることができなかったが、最近是在宅患者が検査あるいは急性増悪などの理由で短期入院しており、その数は年間延べ100名に達している。このように大きく変貌した筋ジストロフィー病棟では、当然従来とは異なる対応が求められると考えられる。そこで、入院患者の重症度および看護必要度をできるだけ客観的に評価、把握することが必要と考え、本研究を行った。

国立病院機構徳島病院 看護部 *小児科

別刷請求先：多田羅勝義 国立病院機構徳島病院 小児科 〒776-8585 徳島県吉野川市鴨島町敷地1354

(平成21年2月16日受付, 平成22年2月12日受理)

Evaluation of Severity and Nursing Requirements of Patients in a Muscular Dystrophy Ward

Junko Mikami, Koji Higuchi, Ken-ichi Nakai, Etsuya Shinbori, Yasuhiro Mihara, Mayu Fujimoto and Katsunori Tatarata*, NHO Tokushima Hospital

Key Words: muscular dystrophy, severity, nursing requirements, mechanical ventilation